

# 有形固定資産(2)

問題集p.39減価償却

# 必須：減価償却費の計算

3級・2級範囲と同じルールです。必ず決算で出題されるので、3つの方法を間違いなく出来るようにする。

$$(1) \text{定額法} = \frac{\text{取得原価} - \text{残存価額}}{\text{耐用年数}}$$

$$(2) \text{定率法} = (\text{取得原価} - \text{減価償却累計額}) \times \text{償却率}$$

※減価償却累計額を引き忘れる人が、結構いる（当日の凡ミス含め）ので注意！

$$(3) \text{生産高比例法} = (\text{取得原価} - \text{残存価額}) \times \frac{\text{毎期の実際生産高(実際利用時間)}}{\text{予定総生産高(予定総利用時間)}}$$

※単なる比率です。当期分  
全体 と覚えてもいいかも。

※仕訳で出てくることが多いですが、まれに決算整理仕訳でも出ます。

# 固定資産の買い換えと除却

使用していた固定資産を下取りに出す際に発生する帳簿価額と売却(下取り)価額との差



固定資産売却損(費用)  
固定資産売却益(収益)

使用していた固定資産を捨てる(除却する)際の帳簿価額



固定資産除却損(費用)

※**固定資産除却損を固定資産売却損と書く、凡ミス**が必ずあるんで注意する！

※決算では、「特別損失」「特別利益」に分類されることが多いので、注意！(決算でもう一度)

# 試験に出る問題例 1 (定額法)

p.41 10-4(1)

第6期(決算年1回)初頭に営業用自動車を¥1,400,000で買入、この代金は、これまで使用してきた営業用自動車を¥280,000で引き取らせ、新車の代金との差額¥1,120,000は小切手を振り出して支払った。ただし、この旧車は、第3期初頭に¥1,000,000で買い入れたもので、耐用年数5年 残存価額は零(0)で、定額法によって每期減価償却費を計算し、間接法で記帳してきた。

車両運搬具 600,000 / 車両運搬具 1,000,000  
減価償却累計額

車両運搬具 1,400,000 / 当座預金 1,120,000  
固定資産売却損 120,000

旧車を消す。間接法で記入しているので、仕訳の形はこうなる。累計額の金額計算は、 $(1,000,000 - 0) \div 5年 = 200,000$ (決算一回の原価償却額) 第3期初頭から第6期初頭まで、決算は3回。(3期末・4期末・5期末。6期は初頭なので、まだ決算前) なので、 $200,000 \times 3回 = 600,000$

新車を足す。小切手を振り出しているなので、貸方当座預金1,120,000。  
帳簿上旧車は $1,000,000 - 600,000 = 400,000$ の価値があると考えていたが、「¥280,000で引き取らせ」とあるので、実質価値は下がっていた。値下がり分を「固定資産売却損」として計上している。

## 試験に出る問題例 2 (定率法)

p.41 10-4(2)

第7期(決算年1回)初頭に備品を¥750,000で買入、この代金は、これまで使用してきた備品を¥300,000で引き取らせ、新しい備品との差額は月末に支払うことにした。

ただし、この古い備品は、第5期初頭に¥640,000で買い入れたもので、定率法により毎期の償却率を25%として減価償却を計算し、間接法で記帳してきた。

備品 280,000 / 備品 640,000  
減価償却累計額

備品 750,000 / 未払金 450,000  
固定資産売却損 60,000

古い備品を消す。間接法で記入しているので、仕訳の形はこうなる。第5期初頭から第7期初頭まで、決算は2回。(5期末・6期末)  
 なので、5期末  $640,000 \times 25\% = 160,000$   
 6期末  $(640,000 - 160,000) \times 25\% = 120,000$   
 よって減価償却累計額は¥280,000

新しい備品を足す。  
 帳簿上古い備品は  $640,000 - 280,000 = 360,000$  の価値があると考えていたが、  
 「¥300,000で引き取らせ」とあるので、実質価値は下がっていた。値下がり分  $360,000 - 300,000 = 60,000$  を「固定資産売却損」として計上している。  
 差額は、  $280,000 + 750,000 + 60,000 - 640,000 = 450,000$  となり、未払金となる。(仕入による後払いは「買掛金」。それ以外の項目の後払いは「未払金」で処理する。)

# 試験に出る問題例 3 (生産高比例法・除却損)

p.41 10-4(5)

石川鋳業株式会社は、当期首にこれまで使用してきた取得原価¥10,000,000の採掘用の機械装置を除却し、廃棄処分とした。ただし、この機械装置の残存価額は零(0) 予定総利用時間数は25,000時間 前期末までの実際利用時間数は22,500時間であり、生産高比例法によって減価償却費を計算し、間接法で記帳してきた。なお、この機械装置の評価額は零(0)である。

機械装置 9,000,000 / 機械装置 10,000,000  
減価償却累計額

固定資産除却損1,000,000

古い機械装置を消す。間接法で記入しているので、仕訳の形はこうなる。減価償却累計額は、  
 $10,000,000 \times \frac{22,500 \text{時間}}{25,000 \text{時間}} = ¥9,000,000$

除却(廃棄)しているので、対価はない。帳簿上の価値  $10,000,000 - 9,000,000 = ¥1,000,000$  はそのまま除却損になる。